

ちょっとだけ!!
フライングディスク
将来構想会議
2020

将来構想メモvol.15(2020/12/29)

Flying Disc Times
presents

<ゲストプロフィール>

西浦正明

活動拠点:

所属:近畿大学附属高校ー近畿大学ー文化シャッター

関わり方:文化シャッターの現役生活のあと、福岡で指導。

オーストラリア勤務でオーストラリアのアルティメットに触れる

山口 友紀恵

活動拠点:

所属:上智大学ーMUD

関わり方:オーストラリアでプレーしたあとクラブジュニアに勤務。

<学生時代のアルティメットは、社会人と違うか>

学生時代:戦術が浅く、運動能力でカバー、ワンマンプレーに頼りがち

→海外から戦術を輸入し戦術レベルが上がった。地域差は今と同様あった。

社会人:「チームで勝つ」

<地域性:関西と関東>

・学生時代はチーム数も少なくSNSなどのつながりもないので、自分たちだけで紅白戦がメイン

→関東学連が学生選手権を1990年に開催(オープン5大学、ウィメン6大学)で学生連盟の大会が開催され関東の大会に呼んでもらうなど人とのつながりが重要だった

<オーストリアでのアルティメット>

西浦さん

- ・きっかけは仕事
- ・用具は一応持参していた。
- ・SNS頼りで参加。
- ・参加者の競技志向レベルは様々
- ・知り合いを通して現地チームを紹介してもらい加入。

山口さん

- ・ワーホリビザで留学。
- ・アルテをする気はなかったが、結果として毎週やっていた。
- ・ナイトアルティメットや公園など。
- ・イベントは会社主催がメインだが、個人でイベントをオーガナイズする人も多い。
- ・日本と同程度の練習量で週3回ほど。

＜オーストラリアアルティメットの特徴＞

・所属選手:ママさんから、大学生まで様々。

・シーズン終了後:他のスポーツや勉強をしたりと、アルティメットだけの生活ではない印象。

全体的な印象

・「勝つために練習する」という感覚はごく一部だった。同好会的な感じ。

・国としての素地なのか、アルテだからなのかはわからないがオーストラリアは気軽に楽しめるシチュエーションが多い。

→国民性の影響では？オーストラリアは個人を尊重する国。個人が出たいという意思があれば出してくれる。

アルテだけではなくて、他の側面でも感じた。公園でやってたのも、ラグビーやクリケットも同じ。

→移民が多いので、他者に対して寛容。街中で普通に話しかけるのもやっていた。他人と交流を持つことに対してウェルカム。

・**SOTG**: 個々人の意識が高い。個人主催のイベントでも、SOTGスコアをつける。日本のチームに、スコアをつけないことを指摘するくらい。

→チーム内でも相手チーム内でも、悪意がある感じではなくフラットにSOTGスコアをつけるときには議論が盛ん。

主張をするときは、きちんと根拠を示す。かつ、議論の中では自分の主張を通すというより、相手と一緒に「納得解」を探す流れ。

・**講習会**: 子供向けの機会はほぼなし。女子のトップチームが誰でもwelcomeなクリニックをやっていて、小学生も来ていた。

・**知名度**: 低いと思う。全くルールを知らない人が入ってくるので、そこで教えてスタート。一緒に、その時間を楽しむ感覚。

→フリスビーは知っているけど、アルティメットは知らない。クリケットとオーストラリアフットボールが熱狂的。

- ・**協会**:所属するのは無料。ただ大会参加費が高い。
→オーストラリア選手権は、300AUD = 25000円。所属はしているので、やめても情報は流れてくる。カジュアルな大会も、全てAFDFに申請をして、大会は全てのイベントがAFDFシステムでエントリーできる。
- ・**マスター世代**:おじさんたちは、自分たちが楽しみたいだけで、集まっていた。上手い人がいるので、そういう人は、マスターでお互いに出場する予定だった。2006WUCCの決勝戦で戦った相手や、2012WUGCの対戦相手など。過去に世界大会で会った人たちもいた。
- ・**オーストラリア選手権**:ボランティアで成り立っていて、そのボランティアでコミュニティーができています。自分はトップレベルでは戦えないけど、ささえるのは好きという人たち。そういう人たちが、個人でもイベント運営もしていると思う。オーストラリアは、誰でも手を上げやすい。コミュニティーを作ると参加しやすいかも。

<オーストラリアでの経験を経て変化したこと>

西浦さん

オーストラリアの人たちは、人を威圧や叱ることをしない国民だと思った。仕事でもアルティメットでも。キャッチミスでも、アンラッキーというコメント。次はできるというメッセージをくれた。日本の所属チームだったら、指を切れと言われると行ったら、爆笑が起きた。

山口さん

日本だと怒られると言ったら、笑われた。視野が広がったと思った。どんなレベルのプレイヤーでも自己肯定感が高い。トライすることに対する自己肯定感が高い。自分は低いという意識がなかったが、低さを感じた。日本選手の自己肯定感の低さに改めてびっくりした。半分以上日本代表だけど、「自分なんか」と思っている。自己肯定感の高さは、パフォーマンスに影響があると思う。自己肯定感にフォーカスして、やっていた。顔が全然違って、アルティメットを楽しんでいた。自分で自分を認めてあげること、それをフィールド上で表現することが大切だと思った。現地の友人との会話で、2013年にハックでプレイをしていた。ハックvsマッドで決勝戦で、彼女が上ぜりに負けたことがあったけど、あの時は負けたけど次は勝つというコメントをしていた。それを当たり前に表現すること。

<フライングディスク界へのメッセージ>

・西浦さん

常々思っていること。今の日本のアルティメット界は、競技人口を増やそうとして色々なところで活動をしている。大学を卒業をしてからやめてしまう人、30代になってやめていく人、そういう人を救っていくことが協会として必要だと思う。競い合うという場は求めている。お金も持っているので、そこが楽しめるイベントを増やしていく。競技人口は少ないので、ある地域だけだと人数が足りない。近くでも、いいと思う。

山口さん

・世の中にはいろいろなアルティメットがあることを、大学生に伝えたい。学生と社会人。国ごとの違い。オーストラリアでアルテをする気もなかったのも、アルテに疲弊をしていた時期だった。その時に、新しいアルテに出会って、楽しさを感じた。部活=義務感で続けるのではなく、新しいアルティメットの形を知ることがいいと思う。

参加者写真

担当メンバー:大島寛

